

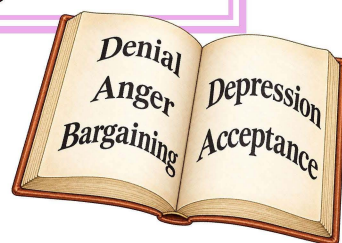


今月のことば 令和8年(2026)10月 <No.242>

苦しみに理由がいる

「こんな本、読まにゃよかった・・・」

ある年、法要のご講師としてお招きしていた先生がおられました。しかし、ご病気のため来られなくなりました。そしてしばらく後、訃報が届きました。



通夜でのお話に、病床の先生のご様子を知ることができました。先生は、死を受け入れていく心の段階を解説した有名な本を読まれ、「こんな本、読まにゃよかった」と言って笑われたそうです。長く仏さまの教えを聞き、語ってこられた先生です。その先生にとっても、死の受容を「説明」する本と、自分自身の「現実」との隔たりを感じて、思わず口にされた言葉だったのかもしれません。

それ、つらつら人間のあだなる体を案ずるに、生あるものはかならず死に歸し、盛んなるものはつひに衰ふるならひなり。

蓮如上人『御文章』三帖目第四通



生まれたものは必ず、衰え死んでゆく。頭ではわかっているのですが、それが「私のこと」になったとき、受け入れがたいという思いが、まず起こります。

先生はこうも言われました。「**凡夫だから、苦しみに理由がいるなあ**」

なぜ私なのか。何がいけなかったのかー。理由がわかれば、納得できるような気がします。納得できれば、受け入れられる気がする。しかしどれだけ探しても、腑に落ちる理由は見つかりません。見つからないまま、また探してしまう。

煩惱具足と信知して 本願力に乗ずれば

すなはち穢身すてはてて 法性常樂証せしむ 親鸞聖人『高僧和讃』

理由を探し当て、受け入れる準備が整ってから、阿弥陀さまが来てくださるわけではありませんでした。あわてて理由を探し始める私のところに、阿弥陀さまは、先に来て待っておられた。煩惱から逃れられない私は、すでに阿弥陀さまの本願のはたらきの中にいた、ということです。

病床で、先生はもう一つ、ことばを残されたといえます。「**先回りの如来さまであつた**」

お聞きするはずだった先生のご法話を、私は通夜の席で、そのお姿を通して聞かせていただいたような気がします。先生、ありがとうございました。



慧日山 真光寺